

語学の達人構造家 樋口久吾

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco◎Switch・エンタテインメント

■一途に

「ナニ派?」と聞かれたら、猫か犬のどちらかを答えるにキマッテイル。が、同じ派でも、『コレしか認めない』的なコアな犬好きがいる。原宿駅の真ん前のビル上階、ヒグチアソシエイツの事務所。扉を開けると、シュナウザー犬・ソフィーちゃんのお出迎えを受けて感極まる。飼い主の構造家・樋口久吾さんとの挨拶もソコソコに、奥様も加わってシュナウザー話を始めた私たち。覇志堂も驚き(怒り?)を隠せないのでした。樋口さんご夫妻とその仲間がネットで呼びかけ、軽井沢塩沢湖のタリアセンで、シュナウザーの会を開くという。その後、顛末お聞きしたら、なんと200匹近くが集まって大盛況だったといえます。ペットにコレだけの拘りをもつ樋口さんが、かなり一途に仕事をされて来たことは想像に難くありません。

■竹下通りで

事務所の所在地である原宿からは、新潟の十日町から来て早稲田大学の学生になり住み着いて以来、出ていない。竹下通りが住宅街だった頃の話。アパート近くの幼稚園児を可愛がっていたら、院生の樋口さんに設計を頼んで来たのがその子の父親でした。学生サンが真面目に建築をやっているようだからと、まるで昭和のドラマです。現存するその建物は地下1階地上3階建の鉄骨造。大学院では、松井源吾研究室で実施設計の経験を積んでいた。「構造設計から研究テーマを! 研究結果から設計へ!」の指導の元、設計事務所のように仕事もしていた。だから、菊竹事務所にいる友人の力も借りて、「ぶっつけ本番でもこなせてしまった」とか。「ストラクチャーを形にしたい」という松井先生の言葉が後押ししてくれた。一緒に飲んでいるときに先生が話されたのです。

竹下通りの草野球チームで活躍して地域の人たちとの交流を重ねた若い頃。その縁で依頼された設計

に、当時は珍しかったボックス柱を使うなどして、その斬新さがうける。以来、原宿に次々と建築を造ってきたのです。事務所の立ち上げ時、最初の三年は「世の中をよく見る」、次の三年は「コンペに挑戦する」と決めて邁進。免震、制震構造の解析や設計もするなか、当初の自作のスローガンである「プロよりもプロらしく」を今でも忘れない。

■英語文献研究も

山梨学院大学付属幼稚園では、ハンガリー人の建築家のパルフィー・ジョージに斬新な構造の理論を提案。小さいスペースに構造を溶け込ませることが苦にならないという。

30歳までは、万博エキスポタワーの風の測定にかかわり、国際風工学会などで研究発表してきた研究者でもある樋口さん。教育者としても1976年から早稲田大学芸術学校で教鞭をとり続けた。専任へのオファーも蹴って、最後まで非常勤で勤務。自由な立場と自分の設計生活を優先できるだけ、バックグラウンドがおりなのだ。教職に追われて、本来の設計の時間が足りない昨今の人には羨ましい話ではないかと、覇志堂と顔を見合わせた。

芸術学校では英語文献研究にも力を入れていた。英語は当然として、ドイツ語は院生時代にドイツのハンブルグ州建設局での研修中に習得し、フランス語も短期間でマスターしたという、優れた語学能力の持ち主です。卒業生のブログに「面倒見がよくて頼りになる先生」とある。現場の職人さんたちからも、よく説明してくれると人気の構造家。カフェで「キューゴ先生!」と声をかけたら、構造とシュナウザーの話をたくさん聞けそうです。

